

基礎看護学実習Ⅱにラベル技法を用いた学修支援 ～ラベル新聞発行・ラベルワークを通して～

呉大学看護学部
加 藤 重 子

論文要旨 基礎看護学実習Ⅱにラベル技法を用いて学修支援を行った結果、学生の学びの場づくり、知の深化、主体的な態度形成が図られた。参画理論から学生支援の考え方、ラベル技法を用いた学修支援の実際について若干の考察を加えた。ラベル技法として、情報の発信・交流を行う「ラベルケーション」、学びを共有・伝承するための「ラベル新聞」の発行、看護体験を振り返り学びを概念化・構造化するための「ラベルワークによる図解作成」を用いた。ラベルを用いることで学生の言語化能力が高まり、傾聴・焦点化の技法を体験的に学ぶことができた。さらに、「ラベル新聞」の発行によりカンファレンスでの学びを共有し深化させることができ、「ラベルワークによる図解作成」により、学びを構造化することができた。このラベル技法を用いた学修支援は、教師能力開発の技法にもなっていた。

キーワード：参画、学修支援、ラベル、ラベルワーク、基礎看護学実習

■ はじめに

学修支援のあり方として、とりわけ高校までの教育では、授業の多くは講義を中心とした学習形態をとっている。講義を中心とした学習は、知識を伝達する方法として優れている。しかし、教師から学生への一方的な講義だけでは、主体的に自ら学び、ものごとに参画する能力を身につけることは難しい。また、そのことは、高等教育における課題でもある。

看護教育においては、実習という実践を通しての学びが重要視されており、学内の授業においても講義を中心とした授業方法だけでなく、グループワーク・ロールプレイ・ラベルワークといった技法を導入し、学生自身が主体的に学びの場に参画する学修形態が模索されている。

林は、当事者の学び方の変化に注目し参加における3段階の理論を提唱している。第一段階を「参集」当事者としてそこにいあわせるという段階、第二段階を「参与」当事者がそこにかかわるとい

う段階、第三段階を「参画」の段階と呼び、二段階から三段階へは飛躍的な変化があるとし、参画とは、その場の当事者が関係者と全体像を共有化しながら、意識的・自省的に計画段階から、実施・評価・伝承段階に至るまで、「場づくり」そのものにかかわり、自らその「部分」をになう開放的・創造的・包括的な関わり方をいう¹⁾。と定義している。高等教育に限らず、あらゆる年代のあらゆる場面で、当事者が参画的に取り組む知識創造の社会の重要性を指摘している。

高等教育においては、教育理念・教育方針に基づき教育内容が精選され、教育が行われている。しかし、学生が主体的に取り組むための教育技法については、専門的な知識・技術に加え各人の創意工夫によるところが大きい。学生が学びの当事者として、参集から参与・参画へと変化していくような教育方法を研究的に開発していくことが急務な課題と考える。

今回、私は基礎看護学実習Ⅱの学修支援の教育技法として、参画理論に基づくラベル技法、情報

の発信・交流を行う「ラベルケーション」、学びを共有・伝承するための「ラベル新聞」発行、看護体験を振り返り学びを概念化・構造化するための「ラベルワークによる図解作成」を行ったのでその結果を報告する。

■ 用語の定義

1. 「参画」とは、その場の当事者が関係者と全体像を共有化しながら、意識的・自省的に計画段階から、実施・評価・伝承段階に至るまで、「場づくり」そのものにかかわり、自らその「部分」をになう開放的・創造的・包括的な関わり方をいう¹⁾。林義樹；参画教育と参画理論，学文社，2002)
2. 「ラベル」とは、ある目的意識を持つての情報または知識の交流や意図的に、生産的思考を行うとき、頭脳に観念されたひとまとまりの認識内容（概念）を物理的に表記したものの²⁾。
3. 「ラベルワーク」とは、人間の知的活動、とりわけ発信交流及び、(知的生産のための)図解思考の道具（媒体）としてラベルを用いる理論と技術の体系³⁾。
4. 「カリキュラム」は、学習の意思を持つ学生と教師の間や学生間で行われる交流と相互作用と定義している⁴⁾。(E. オリヴィア・ベヴィス；ケアリングカリキュラム)

■ 目的

1. ラベル使用の目的；学生参画授業としての臨地実習における学修支援を行うため。

1) 学生に対して

- ①臨地実習の事前に学びたいことを明確にする。
- ②実習で起こる学生の「日々の気持ちの変化」と「学び」を自覚する。
- ③①と②から自己評価に活かす。
- ④学び合い、学びを共有する。
- ⑤実習を通して学んだことをメンバー同士で学んだことを明確にし構造化する。

2) 支援者として

- ①実習事前に学生各個人の学びたいこと、気持ちを共有する。
- ②実習で起こる学生の気持ちに気づく。
- ③学生のありのままの気持ちを受け止め、気持ちを出してよいことを伝える。
- ④一人ひとりの体験に基づく学びを丁寧に読みその意味を学生と共に考える。
- ⑤実習で経験を通して起こっていること、理論に対照させて学ぶ学び方を見えやすくする。
- ⑥一人ひとりの気持ちや学びを改めて再掲し学びの自覚化を促す。
- ⑦学生が自分たちで学びを構造化することを助ける。
- ⑧日々の学生への関わり、学生が学びを深められているか、学生の学びたいこと、実習の目

表1 学修支援の体系—学生が自分で学びを構造化する—ラベル使用の目的と時期・理論背景

時期	実習事前支援	臨地実習支援(毎日ラベルを記述)			実習事後支援
	学内	実習前半	実習後半		実習最終日
ラベル技法	私の目標 3枚	学び 1枚			基礎看護学実習Ⅱ で学んだこと 3枚
	今の気持ち 1枚	気持ち 1枚			
	ラベル新聞発行				
目的 (学生)	学びたいことを 明確にする	日々の気持ちの変化に気づく・自己の学びを自覚し自己評価にいかす・学び合い学びを共有・			学んだことを明確にし構造化する
目的 (支援者)	学生の目標・ 気持ちを共有	学生の気持ちに気づく・学びを支援する・教師の自己評価にいかす・			
カンファレンス内容		ラベルケーション	プロセスレコード	看護計画発表	サマリー発表
学習者の 体験	期待・不安	承認・ゆらぎ・賞賛			リフレイミング 達成感
支援者の 姿勢	学習者主体・個の尊重・信頼・倫理観				
理論	参画理論				

(看護の知を紡ぐラベルワーク技法 加藤作表一部改変)

的目標を達成するべく支援・指導・調整ができているか自己評価する。

■ 方 法

1. 学修支援対象者 基礎看護学実習Ⅱで担当した学生

2. 研究期間 : 平成17年3月～8月, データー収集期間: 平成17年3月

3. ラベルを用いた実習支援の方法

1) ラベル使用のねらい

実習目的・目標, および学生の立案した自己の目標を達成できるように支援する

- ①今の気持ちを表す。(自己の感情に気付く)
- ②テーマにそって記載したラベルをもとに, 語る。(言語化能力)
- ③相手の語りを聴く。(傾聴する力)
- ④相手が思っていることを, 「こう思っているんですね。」と返す。(焦点化する力)
- ⑤ラベルを構造化し, 学びを図解にする。(学びを構造化する力)
- ⑥新聞を発行する。(学びの共有・伝承する)

2) 学修支援に用いるラベル技法

- ①ラベルケーション (ラベルをきっかけにカンファレンスをする。)
- ②ラベル新聞の発行 (毎日実習終了後に記述した「今の気持ち」「学び」ラベルをもとに新聞を作成し発行する。)
- ③ラベルワーク (テーマを決めて, 元ラベルを作成し学びを構造化する。)

3) ラベル技法の手順

ラベルは, 三枚複写のラベルを使用する。

- ①日々, 感想・学んだことをそれぞれ一枚記載する。
- ②一枚は, 学生が持ち, 一枚は教員に渡し, 一枚は新聞発行に使う。
- ③ラベルを元にカンファレンスを行う。(ラベルケーション)
- ④カンファレンス概要・内容を, ラベルを用いて一枚ものの新聞にして実習メンバー, 指導者に発行する。
- ⑤ラベル新聞を読む。
- ⑥実習まとめとして, ラベルワークを実施する。

4. 倫理的配慮

- ①臨地実習開始前に対象者全員 (学生) にラベ

ル使用の目的・方法, 使用は自由意志であり成績には一切関係しないことを説明し, 全員の同意が得られた後にラベルを使用することを決定した。

②実習支援の方法と得られた成果を研究会・学会等で公表することの承諾が得られた。

5. 基礎看護学実習Ⅱの目的・目標

1. 実習目的

看護過程の展開を通して看護実践を理解する。

2. 実習目標

- 1) 受け持ち患者との人間関係を形成しながら, 患者の健康問題・看護問題アセスメントのための情報収集ができる。
- 2) 受け持ち患者の健康問題・看護問題をアセスメントし, 病棟でおこなっているアセスメントと調整する。
- 3) 看護問題のアセスメントに基づいた援助計画を立案し, 病棟と調整する。
- 4) 援助計画に従って, 受け持ち患者への援助を実践する。
- 5) 受け持ち患者に行った看護援助と, 患者の健康問題・看護問題の解決とを合わせて評価し, 病棟の評価と調整する。
- 6) 看護過程全体を通して既修の看護に関する看護理論・知識・技術を応用する。

■ 結 果

1. ラベル新聞を発行して

1) 臨地実習事前「私の目標と今の気持ち」

図1

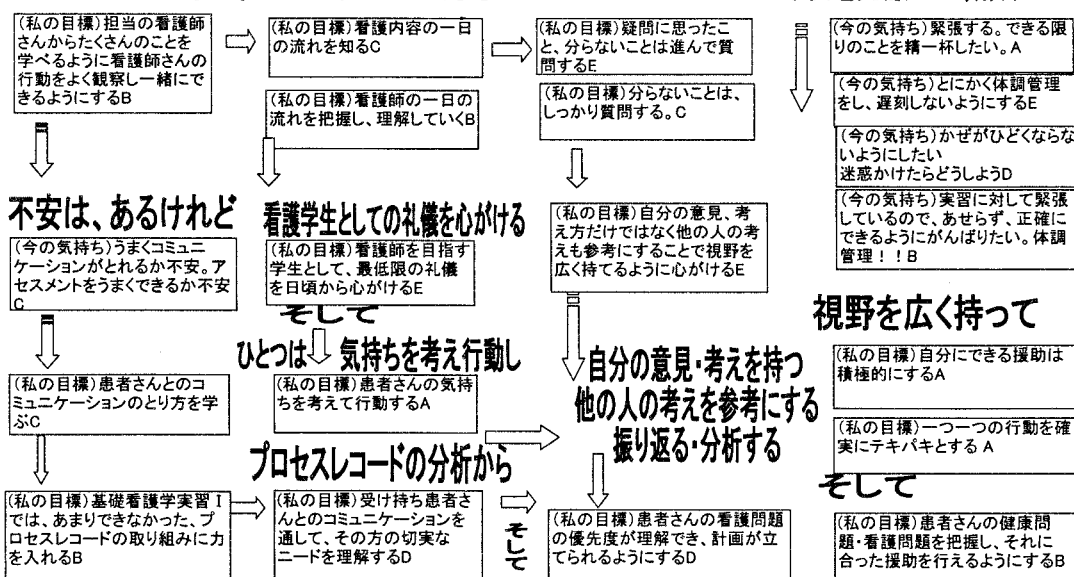
臨地実習を前にして, 「患者さんとうまくコミュニケーションが取れるだろうか? アセスメントできるだろうか? 迷惑をかけたらどうしよう。緊張する。焦らず正確にできるようがんばりたい。できる限りのことを精一杯したい。」と不安はあるけれどそれを克服してがんばりたい気持ちで一杯の学生の様子が見て取れる。それぞれが自己の目標を明確にし, 実習においては, 「看護学生としての礼儀を心がけ, 患者さんの気持ちを考えて行動する。」そして, 「プロセスレコードの分析から切実なニーズを理解する」としている。また, 「自分の意見・考えを持ち他人の考えを参考にしながら視野を広くもちたい。」そして, 「切実なニーズと, 分析から患者さんの看護問題の優先度が理解

ラベル新聞

発行年月日 2005年2月末日
情報源(ラベル)私の目標15枚 今の気持ち5枚

私の目標と今の気持ち

不安を克服して頑張りたい



各自、学内でのオリエンテーション後「今の気持ち」「私の目標」を立てラベルに記述し、発表。ラベル新聞にして共有・伝承をする。実物を二分の一に縮小。全員で、気持ち・目標を述べ合いグループの気持ち・目標として構造化し、実習による学びがスタートした。グループの親和性・凝集性を高める。

図1

でき看護計画が立てられるようにする。」「自分のできる援助は積極的にする。一つ一つの行動を確実にテキパキとする。」そして、「患者さんの健康問題・看護問題を把握し、それにあった援助を行えるようにする。」と学生一人ひとりの目標や気持ちが手に取るように分かる。実習にむけて、グループ全員が自分を方向付けている。

2) 臨地実習中

①「看護師さんに一日密着して学んだこと」 図2

病棟での実習終了後すぐに、今の「気持ち」と「学び」を各自記述し、ラベルを元に話し合った(林の造語「ラベルケーション」)。「ラベル新聞」は、学生が記述したラベルの傍に、語られた言葉を補足しラベルに記述された言葉の意味が伝わりやすくした。一枚もので読めることが「ラベル新聞」の手軽さなので、補足は紙面に収まるように配置した。

一日看護師に同行すると、患者さんが「自分のことは自分でしたい」と思っておられる気持ちを聞いたこと、「長生きしたい。」手術に対する不安、病状が回復しないことの不安を感じていること、自ら服薬管理を行っていること、等たくさんのが見えてきた。そして、コミュニケーションから体調の変化を知ることが大切だと感じ、「言葉や

表情をしっかりと見よう。」と自らを方向付けている。

退院される方が持ちきれない荷物を持っていたので思わず、外来までお送りしたいと思い自分がどう行動したらよいのか指導者に相談し解決を図ったこと、患者さんから「お水が欲しい」と言われどのようにしたらよいのか戸惑ったことが語られ、「自分がテキパキ行動できなかったけれどがんばりたい」という学生の気持ちがラベルから伝わってくる。

「看護師の行う看護援助には、一つ一つ根拠がある」ことが理解でき、「患者さんの会話には、さまざまな心の動きが入っているの、ただ質問に答えるだけでなく心情まで読み取れるようにしたい。」と学びを深め、さらに自分の行動の示唆を得ている。プロセスレコードを用いたカンファレンスで、「自分が気づかなかったことを他の学生から聞いて違う角度から考察することができた。」と記述している学生に対して、「自分も同じように思っていたかもしれない。」気づかなかったのはあなただけでないよ。と肯定的なメッセージを送っていた。「ラベル新聞」を読むと、そこに居合わせた者は、その場にすぐタイムスリップしその時の語りを、感情を伴って思い起こすことができた。さらに、指導者やその場に居合わせなかった者にもその幾分かでも、伝えることができた。

②「基礎看護学実習Ⅱ 3日～4日の学びの飛躍」

図3

実習3日目は、「ラベルケーション」は実施せず、翌朝「ラベル」を提出したため、4日目と時系列

で学生ごとに「ラベル」を横に並べて置いている。3～4日目は、プロセスレコードを用いたカンファレンスからの学びが多く記述されていた。実習3日目は、「患者－学生関係が深まり、うまく

ラベル新聞 看護師さんに一日密着して学んだこと。

情報源：学び5枚今の気持ち5枚
発行年月：2005年3月晴天

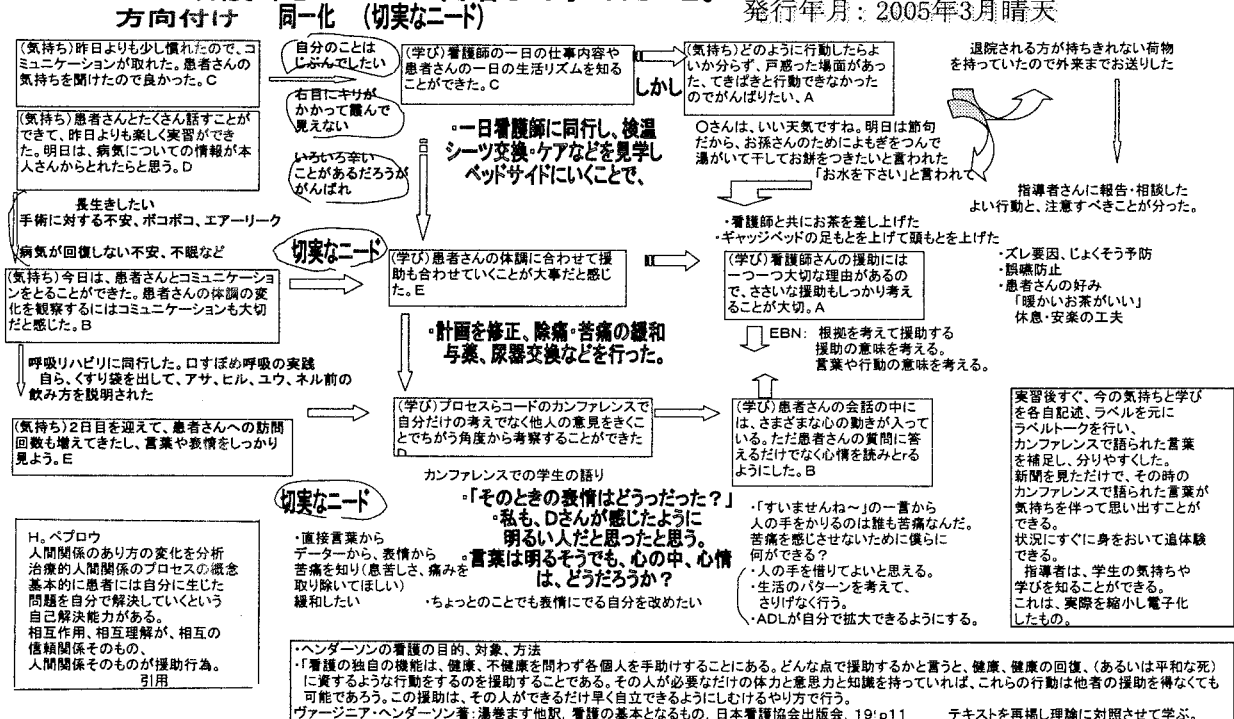


図2

ラベル新聞 (基礎看護学実習3日～4日目の学びの飛躍)

情報源(ラベル)学び10枚 気持ち10枚
発行年月日：2005年3月○日雨

左半分が、実習3日目、右半分が実習4日目
(プロセスレコードを用いたカンファレンス後
記述したラベル。飛躍的に成長している。



図3

コミュニケーションが取れることにより、行える援助の幅も広がることが分かった。」「実習をしてペプロウの理論への理解を深めることができた。」「カンファレンスで開拓利用が良く理解できた。」「体調の悪いときの情報収集の仕方が分かった。」「患者さんの自己解決能力を高めるためには、相互の信頼関係、人間関係が大切だと分かった。」と学びを記述している。実習4日目は、「自分が進んで患者さんに話していることに気づき、うれしかった。」「自分の思ったニードが間違いでなかったことがうれしかった。」「自分の成長の自覚とさらなる成長欲求がある。また、患者さんが学生の手によりしっかりとつかまったその強さから、「最初の時よりも、患者さんが少しずつ気を使っていると感じるものが少なくなったので、嬉しかった。」と気持ちを素直に表現している。このことが、患者-学生関係をさらに進展させている。そして、患者さんの「動く」と苦しくなる」を理解して、「援助や工夫をすると患者さんが進んで行うことがわかった。」「開拓利用されていると自分で気づけた。」「カンファレンスをして、家に帰ってからの生活を改めて考えることができたし、いろいろな視点から患者さんについて考えなければならないと分かった。」「カンファレンスを通して、患者さんの健康状態を高めるだけでなく、現状維持を大切にすることが分かった。」と記述し、気持ちや

学びのラベルから、学生カンファレンスと指導者の助言により芯から分かったことが手に取るように見えてくる。

③「一週間を終えて、三者カンファレンス後」

図4

「患者さんとの距離が近づいていることが嬉しい。」「顔が見られなくて寂しかったと言われて嬉しかった。」「退院の援助としてパンフレットを渡した時、すごく喜んでくれたのでよかった。」「退院への援助が自分なりにできた。」「患者さんが自分の不安な気持ちや困っていることをたくさん話してくれたので少しでも力になりたいと思った。」と患者-学生の相互依存の関係や、学生の自己への信頼感・自己肯定感が高まっている様子が分る。三者カンファレンスは、見落とししている重要な情報に気づけるように助言を受け実態とズレはないか情報解釈・看護計画を修正している。その中で、複雑な病態・発達段階・病期から統合的に解釈する必要があるために、学生は、「常在条件や病理的状态を関連づけてアセスメントするのは難しい。」と記述している。「関連づけていくことが大切だと分かった。」「気持ちばかり考えてもいけないし、病気のこともばかり考えて援助するものいけないと分かった。」さらに、「家族構成・キーパーソンが誰かという情報が治療を選択すると

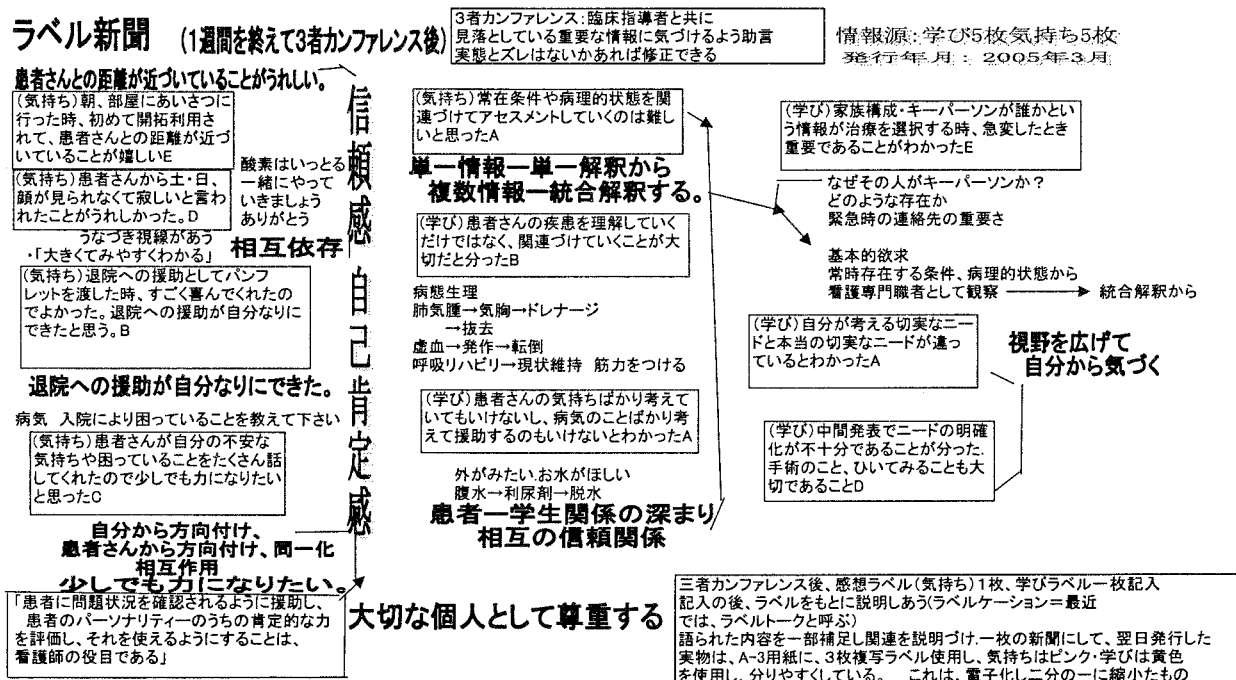


図4

き、急変したとき重要であることがわかった。」「統合的に考え助言を受けることで、自分が考える切実なニーズと本当の切実なニーズが違っていると分かった。」「中間発表でニーズの明確化が不十分であることが分かった。」「引いて見ることも大切である。」と、カンファレンスにより視野を広げ自分から気がついた様子が見える。

④「基礎看護学実習Ⅱ 2週目」 図5

「気持ち」のラベルでは、「患者さんの行動から喜びを感じることができ、自分の行動で患者さんがよろこんでくれることはとてもうれしいことだと思った。」「他の看護師さんと同じように何でも訴えてくれることが認めてくれる気がして嬉しい。」「患者さんの生活のペースや気持ちがつかめたので、何をしたらよいのか、動けるようになったのでよかった。」と看護師として自分が認められていることを素直に嬉しいと記述している。また、「患者さんの病状の変化に伴って計画の修正が必要になり、看護過程のアセスメント・援助計画がうまく立てられて、実施できるようがんばる。」と記述している。これは、「指導者さんが治療が手術になるかどうか分からないから立案しにくいと思うけど大丈夫？と尋ねてくれてそう思った」と述べていた。学生は、看護師や指導者・患

者さんからも支援されていると感じて実習することができている。「学び」のラベルでは、「患者さんに合わせることで、患者さんにできることをやってもらうこと、一度安静にして症状が回復してから筋力アップしていけばよいことが分かった。」「リハビリ内容の意味をよく知ったうえで見学すると、その効果が分かった。」「看護師さんと検討の結果、自分の立てた計画と一致していると分かった。」と記述し、患者さんの生活のペース・気持ちを理解すること・治療内容を理解すること、そして、アセスメントプロセスを明確化してその人にあった計画を立案し基本的ケアを実施することを学んでいる。既修の知識に照合させることを助けラベル新聞にテキストの記載事項を再掲した。

2. 実習まとめのカンファレンスに「ラベルワークによる図解作成」を行って

臨地実習事後「基礎看護学実習Ⅱで学んだこと」 図6

二週間の実習を終え、サマリーの発表も終えた後、実習まとめのラベルワークを行った。テーマは、「基礎看護学実習Ⅱで学んだこと」。テーマに対して学生は、3枚の「元ラベル」をそれぞれ記述した。全員がラベルの記述を終えてから、ラベ

ラベル新聞（基礎看護学実習2週目）

受け持ち初日、方向付けの局面をスムーズに迎える

（気持ち）今日は、新たな受け持ち患者さんとの関係づくりとしてコミュニケーションがよくとれたのでよかったですB

私のところに来てくれたの？と病室の入り口で迎えられ

自分の援助で患者さんが喜ばれうれしい。

（気持ち）患者さんの行動から喜びを感じることができ、自分の行動で患者さんがよろこんでくれることはとてもうれしいことだと思った。

白菜のおつけもの「あなたも食べてごらんさい」「奥さんもおあがり」「プチトマトはすっぱそうな顔、おいしい小さきりすぎている」

・整髪、口腔ケア・義歯洗浄・食事の援助して

看護師さんと同じように何でも訴えてくれ

認めてくれた気がして嬉しい。

（気持ち）他の看護師さんと同じように何でも訴えてくれることが認めてくれる気がして嬉し

い。

・テレビのスイッチ、リモコン、ナースコール

・その水は、ミネラルがはいってるとんよ

・点滴はおなかでふくれる

・苦しくなる、ポロと水は、近くに

・4日目まで病状が変化して・・・

・ご家族がこられる。

患者さんに合わせて一つ一つの行動を確実にする

（学び）接遇の時は、患者さんに合わせて一つ一つの行動を確実に実行していくことが必要だとわかった

患者さんにできることをやってもらうこと

（学び）患者さんのできることは自分でやってもらうことの大切さを学んだA

・ご自分で髪をかきあげる

・ご自分で義歯を外し、装着される

・トマトをつまんで召し上がる

今日はよくわられる

安静にして、症状が回復してから筋力UP

（学び）無理に筋力を回復させるのではなく、一度動かずに体の症状が回復して行っていくことも大切であることがわかった。E

体力・意思力・知識の不足

・著しい体重減少、ういそう、

呼吸困難、頻脈、じょくそう、ねたきり

患者さんを受容、こころと体の回復を支援しつつ

筋力維持、アップを考える

めていくことが知らねばなりません。また、患者の年齢や知能の程度、生活経験や

生活環境、価値観、気質、そして障害や疾患に由来する限界のそれぞれに

合わせたサービスができればなりません。

一指示された治療法を理解し実行するのを助けなければならないのですから

医療の勉強をずっと続けていかなければなりません。人は誰でも、自分の知っ

ている範囲内のことしか他者に教えることはできないのですから。

バージニアヘンダーソン論文集増補版、小玉香津子編訳、日本看護協会出版会

情報源：学び5枚気持ち5枚

発行年月日：2005年3月○日曜から日

A-3用紙を二分の

一に縮小し電子化

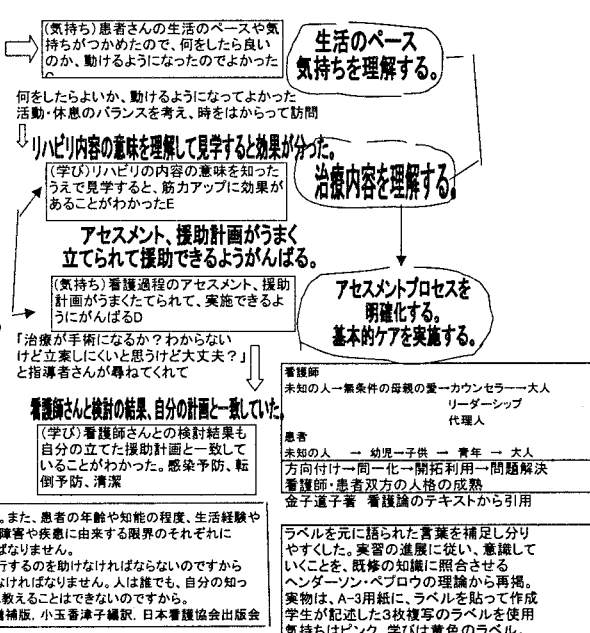


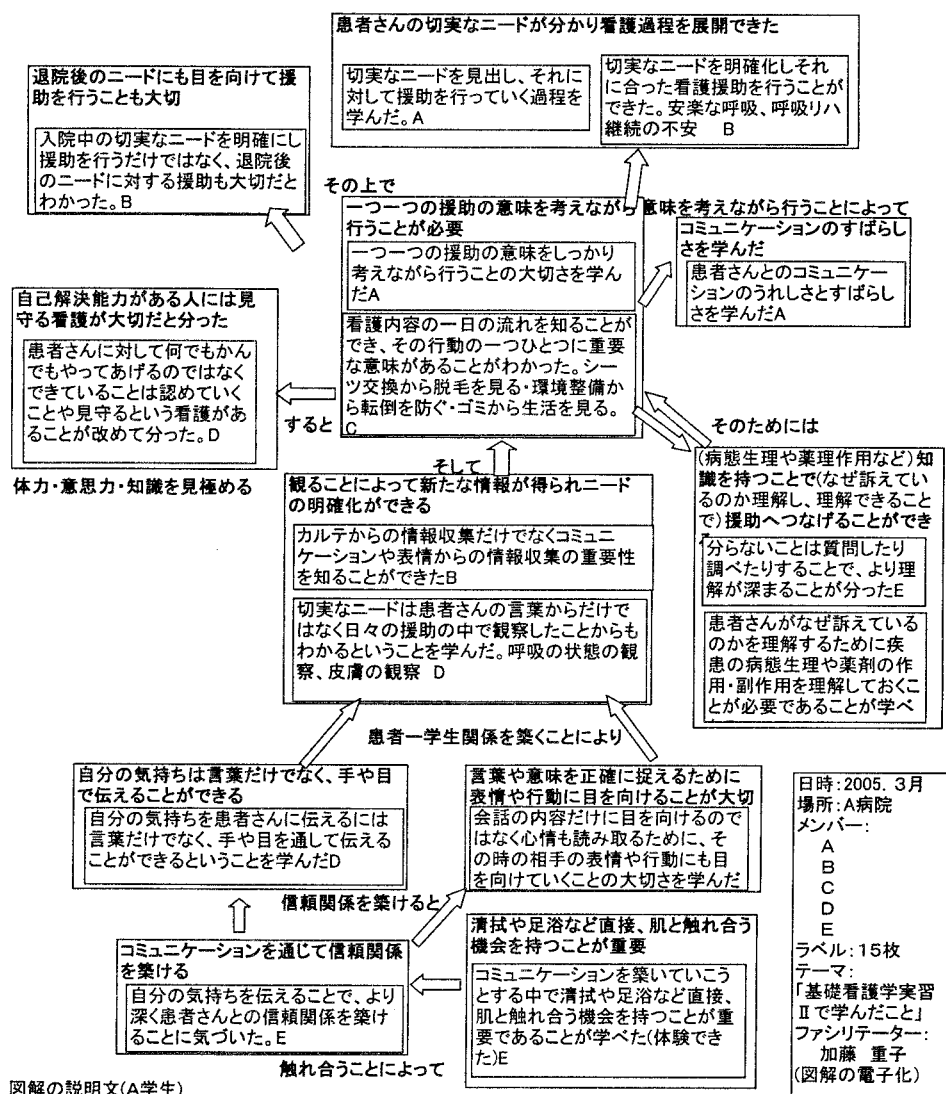
図5

A 3用紙を二分の一に縮小し電子化

ルワークを行った。私は、ファシリテーターとして、同じ意味内容でラベルを合わせる（手順1）こと、さらに合わせたラベルの言わんとすることを一文で看板をつける（手順2）こと、学びを構造化していく（手順3）こと、出来上がった図解に一文でタイトルをつけ、テーマに対する答えを生み出す（手順4）ことを支援した。学生は、日々のカンファレンスからお互いの記述した「ラベル」

の言わんとすることをよく理解していた。手続きを踏むことを指導すれば、ラベル合わせにあまり助言は必要ではなかった。学生は、日々の「ラベル新聞」を見て、構造化するというにも馴染んでいた。構造化は、皿（同じ意味内容のラベルを貼ったカラー用紙＝意味を載せた空間）と皿の関係を見て自分たちで何度も皿を配置しなおし、接続詞でつなぎ、構造化し図解を作成した。テーマ

患者－学生関係を築くことから看護過程の展開が始まる



図解の説明文(A学生)

テーマ「基礎看護学実習Ⅱで学んだこと」について実習最終カンファレンスでラベルワークを行った。清拭や足浴など、肌と触れ合う機会を持つことでコミュニケーションが築け、また自分の気持ちをつたえることで信頼関係が築ける。それにより、言葉だけでなく手や目で伝えることができ、表情や行動に目を向けることで相手の言葉や意味を正確に捉えることができるようになる。これらによって患者－学生関係を築くことができ、表情や何気ない日常会話の中から切実なニーズを捉えることができる。切実なニーズを捉えることで、初めて患者の状態・欲求にあった援助を明確化することができる。また、そのニーズを充たすためには、看護者が知識を持ち、一つひとつの援助の意味を理解し行うことが必要である。それを理解し行うことで、コミュニケーションのすばらしさが学べ、見守ることもまた看護であることが分り。入院中だけでなく退院後の切実なニーズにも目を向け援助することも大切であることがわかる。このように、患者－学生関係を築くことで切実なニーズを捉えることができ、ニーズを捉えることで看護過程を展開することができた。基礎看護学実習を通して学んだことの図解のタイトルは、「患者－学生関係を築くことから看護過程がはじまる」とした。

図6

マに対する答えは、タイトルとして「患者－学生関係を築くことから看護過程の展開が始まる」と表された。

学生だけで、図解の説明文を作成した。(Aさん代表)

清拭や足浴など、肌と触れ合う機会を持つことでコミュニケーションが築け、また自分の気持ちを伝えることで信頼関係が築ける。それにより、言葉だけでなく手や目で(気持ちを)伝えることができる、(患者さんの)表情や行動に目を向けることで相手の言葉や意味を正確に捉えることができるようになる。これらによって患者－学生関係を築くことができ、表情や何気ない日常会話の中から(患者さん)「切実なニーズ」を捉えることができる。「切実なニーズ」を捉えることで、初めて患者の状態・欲求にあった援助を明確化することができる。また、そのニーズを充たすためには、看護者が知識を持ち、一つひとつの援助の意味を理解し行うことが必要である。それを理解して行うことで、コミュニケーションのすばらしさが学べ、見守ることもまた看護であることが分かり、入院中だけでなく退院後の切実なニーズにも目を向け援助することも大切なことであることが分かる。このように患者－学生関係を築くことで「切実なニーズ」を捉えることができ、ニーズを捉えることで看護過程を展開することができた。基礎看護学実習Ⅱを通して学んだことの図解のタイトルは、「患者－学生関係を築くことから看護過程がはじまる」とした。

と記述している。

3. 基礎看護学実習Ⅱの目的・目標の達成

実習目的「看護過程の展開を通して看護実践を理解する。」、実習目標1)から6)は、達成された。結果の2, と3, から目標達成の様子がわかる。

実習目標1)について、「気持ち」ラベルから、学生が患者－学生関係をどのように感じていたのか、「学び」ラベルからどのように関係を形成しているのかを知ることができた。

実習目標2)と3)について、アセスメント・アセスメントに基づいた援助計画を病棟とカンファレンスを通して調整することにより、どのように感じていたのか、何に気づくことができたのかを知ることができた。難しさや、視野が広がったことがわかる。

実習目標4)5)について、援助計画に従って、援助を実践・評価しどのように感じていたのか実践を通して、どのように学んだのかが分る。

実習目標6)について、ラベルに既修の看護に関する用語が表現されており、既修の看護理論・知識・技術に照合させて学んだことがわかる。実践において、応用して学んだ様子が「学び」ラベルやカンファレンスで語られた言葉の再掲した新聞により分る。

■ 考 察

1. 実習・カンファレンスへの参加の様子

ラベルを使うことの効果「話す」・「聴く」・「語り合う」を促進

現代の学生は、特に人間関係能力とりわけコミュニケーション能力が低下しているということをよく耳にする。ただテーマを与えてグループワークをすすめるだけでは発言する人だけが話す。あるいは、すぐに沈黙になることを私もよく経験している。そこで、コミュニケーション、言語化を促進する、交流をはかるひとつの方法としてラベルワークを用いた教育方法が報告されている。ラベルを元に話すことで、ラベルに書いた意味を、説明し「こういうこと」「なぜこう考えた」、を繰り返していくことにより、正しく人に伝えようとする、理解しようとする、思考能力が高まり自己の考えを明確にすることができる。ラベルには、フルネームで自分の名前を記述しており、他の誰でもない「私の気持ち」と「私の学び」が記述されている。これが、自ら場に自己を投入し主体的にかかわっていく姿勢を育てている。一人一枚の「気持ちラベル」は、人格をもつラベルとして大切にされる。何度も問い返され、またその思いを語ることができる。ここに参加の

表2 参加の3段階(参加者の関わり方の変化に注目して)
(1990林改訂)

段階	コンセプト	キーワード	行動のレベル
第一段階	参集 Attendance	いあわす	個人的
第二段階	参与 Collaboration	かかわる	集团的
第三段階	参画 Commitment	にないあう	組織的

(看護の知を紡ぐラベルワーク技法 p.163引用)

表3 参画理論の参加の3段階における知識創造の様相

			G指標群			H指標群			N指標群		
			外面指標 (可視指標)			半内・半外指標 (半可視指標)			内面指標 (不可視指標)		
段 階	コンセプト	キー ワード	G 1	G 2	G 3	H 1	H 2	H 3	N 1	N 2	N 3
			知の 流れ	知の 所在	* 知 産 への 参加	知の 範囲	知の 様相	知の 志向	知の 関心	知の 深度	知の 姿勢
第1 段階	参集 (Attendance)	いあ わす	一 方	個人	D のみ	局所	断片的	広さ	言 (こと)	知識	消極的
第2 段階	参与 (Collaboration)	かか わる	双 方	集団	S まで	部分	关系的	深さ	人 (ひと)	認識	積極的
第3 段階	参画 (Commitment)	にな いあ う	多 方	組織	Pと T まで	全体	総合的	高さ	場 (ば)	意識	創造的

(看護の知を紡ぐラベルワーク技法, p.163引用)

段階を進展させるしかけがある。林は、(表2に)参加の三段階を表している。これに照合させると、はじめ、その場に「参集」している学生はカンファレンスに居合わすという参加の仕方であり行動のレベルは個人的であるが、参加の段階が二段階にすすむと、自ら発言し問い、問われることにより、「参与」へとその関わりが変化し、カンファレンスで、問題解決を図ろうとしたり、学びを深め新たな知を創造しようとする関わりが生まれ、第三段階の「参画」担い合うという組織的なレベルにまで発展して学ぶことができる。

2. 知識の深まり

表3は、林の参画理論の参加の3段階における知識創造の様相を示したものである。参加の第一段階では、一方的で、個人的で、知を生み出すことへの参加は、行う[DO]のみであり、知の範囲は局所、様相は断片的、姿勢は消極的であることがわかる。知識の範囲は、参集・参与・参画と段階が上るにしたがって、局所、部分、全体へと広がり、知の関心は、言、人、場へと拡大進化している。知の姿勢は、参集段階では、消極的、参与では、積極的、参画では、創造的と変容している。

実習のカンファレンス場面、カンファレンスから実習への発展においても、同様のことが言え

る。

「感想ラベル」・「学びのラベル」からカンファレンスで語られた内容は、ラベル新聞(図1から5)のように参加姿勢が発展し、知が創造されている。ラベル図解(図6)に集約されていく。

学生の知への参加は、[Plan]計画・[Do]実施・[See]評価・[Transmission]伝承へと変化する。自分で学びを評価するだけでなく、人に伝えたい思いに自分が動かされている。知の範囲は、局所しか見えていなかったが、部分、全体へと変化している。そして、知の様相は、断片的から、相互関係を見るように変化し、総合的に考え看護を創造していくようになっている。

知の深度は、参加の段階が第二、第三と深まっている。学生一人ひとりが、関わりあうことから、次第に自分たちで担い合うという参画の段階まで変化したことが、ラベル新聞・ラベルワークへの参加姿勢、実習での学びそのものに表れている。

3. 実習支援の方法としてラベルを使用することの意味；患者主体の看護、学生主体の実習、参画教育を目指す実習支援の実現のため

三枚複写のラベルを使用することで、一枚は、学生の手元で日々「気持ちラベル」「学びラベル」が一枚、また一枚と増えていく。学生は、自分の

気持ちの変化と学びの深化を自覚しながら実習をすすめていくことができる。教員は、学生一人ひとりの気持ちの変化と学びの深化を知りながら実習を支援している。ラベル新聞を作成することによって、グループの気持ちや学びを常に理解し、実習目標と学生の一人ひとりの目標に照らし合せて、自分の指導を振り返り評価することができる。ラベルを使うことで、学生・指導者・教員の三者に実習の進展を見えやすくすることが可能になる。さらに、患者－学生間・学生－学生間・学生－教員間・学生－指導者・看護師に起こっているダイナミックな相互作用が見えやすくなる。気持ちや思考過程を見えやすくすることで、実習を支援する教員と指導者がよりよく学生を理解することができる。学生をより理解できることで、適切な実習指導がしやすくなる。ラベルを用いることは、学生の気持ちを支え、学びを支える確かな支援の方法の一つであると考ええる。

参加の姿勢が参集から参与へと確かに段階を踏んで、参与から参画へと飛躍的に変容していく姿は、学生の成熟の姿そのものである。

ベヴィスは、カリキュラム開発の中心命題（それ以外はすべて補足である）は、「カリキュラムは、学習を起こすという意図をもった、学生と教師との相互作用であり交流である」相互作用や交流は、同等の参加者すなわち学習者同士の間で、だれにでも平等に、兄弟や姉妹の間のように起こる⁴⁾。と述べている。学習を起こすという意図を持つということがまず参加の姿勢の重要な姿勢であり、そのもの同士の相互交流により創造していくものをカリキュラムであると考ええる。教師が一方的に教えるという教育法とは相容れないものがある。学習者の参加姿勢は、参与、参画へと進展していく主体的な学び自分で創っていく、教師と学習者が、そして学習者同士が担い合う関係が誰にでも起こるという立場をとっている。そして、ワトソンは、カリキュラムは、学習者の成熟、自主的な学習を促進する教師と学生との相互作用を選択する教師によって支持され、また、統合的学習や状況に応じた学習、そして、探求的学習に分類される個々の学習項目を設定し、選択する教師によって支持されるということである。と述べている。

教養のある人物のしるしである創造的思考能力を身につけるには積極的学習、すなわち教師と学習者双方が知的努力を傾ける学習の必要 という立場をとり、学生を成熟の方向に向かわせるには、

学生が主導になり、自分の学習計画に責任を追うような教授戦略が必要である。カリキュラムの開発はすべて、教師の成長とともに始まるというものであると述べている。林の参画理論に基づく、参加の段階の最終段階の「参画」Commitmentに向かわせる戦略が必要であると考ええる。そして、教師自身が「参画」し主体的に学びの場を創造する事によりその戦略を実現させていく必要がある。ワトソンは、教師には、自分自身が積極的に自主性を育む、公平な教育を支持する教育ツールや教育技能の1つとなり、成長していけるような指導と援助、支持が必要である。このような立場が核となって、自主性を育むカリキュラムの開発の改革の実質と方向を与える全体像、すなわちパラダイムへと収束する。と述べている。

私は、林の参画理論と参画理論に基づくラベル技法は、その自主的で公平な教育を支持する教育ツールであり、教育技能のひとつであると考ええる。

学生の成熟そのものに影響を与える教師や指導者はその意識を常に持ち、学生の成熟を助長していけるように研鑽していく必要がある。

そして、一つひとつの経験を大切に、その意味を明らかにできるように、経験からの学びを言語化する能力・語り・聴く能力を育成し、自己教育力・対人関係能力を基盤に、将来にわたって看護を創造しつづけられる看護実践能力を身につけていくことを支援していくことが必要であると考ええる。

■ おわりに

現代若者特性が変化しつづけ、価値観も大きく変化している。教育改革が行われ2007年度からは、新しい学習指導要領に基づいた学生が入学してくる。義務教育では、ゆとりの教育により学修内容の削減が図られたことによる学力の低下を指摘する者もある。一方では、偏差値・内申重視など学校間の格差が大きい。また、18歳人口の減少、経済状況から資格志向、生涯教育のニーズから社会人の入学希望者数の増加などにより各大学はユニバーサルアクセスの時代を迎え教育内容・教授方法などのさらなる見直し・改革が迫られている。

看護系大学においても例外ではない。そして、臨地の場においては、看護実践能力の向上・エビデンスに基づく看護が求められており、看護基礎教育から高い倫理観、的確な技術・知識をもつ自己教育力のある学生の育成が要求されている。この

ような背景にあり、教員だけで看護学教育を考えて行くような経営のありかた自体変容しなければならない時代が到来している。学生・教員・患者・利用者・地域の人々が一緒になって特色ある学校、魅力的な授業を創りあげていく必要がある。

私自身の教育力を謙虚に受けとめ能力の開発につとめなければならない。今回は、自分にできる教育技法としてのラベル技法を用いた実習支援の展開を報告した。今後も学生と共に学びを創造し研鑽していきたい。

引用・参考文献

- 1) 林義樹：参画教育と参画理論－人間らしい『まなび』と『くらし』の探求，東京，学文社，p.197，1999.
- 2) 林義樹：学生参画授業論－人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法，東京，学文社，p65，1999.
- 3) 林義樹監修：看護の知を紡ぐラベルワーク技法－参画型看護教育の理論と実践，東京，精神看護出版，p29，2004.
- 4) E. オリヴィア・ベヴィス，ジーンワトソン，安酸史子監訳：ケアリングカリキュラム 看護教育の新しいカリキュラム，東京，医学書院，p65，1999.
- 5) 安酸史子：学生自身の体験を基にした臨床実習教育，インターナショナルナーシングレビュー，Vol. 23, No.5, 2000.
- 6) 林義樹監修：看護の知を紡ぐラベルワーク技法 参画型看護教育の理論と実践，精神看護出版，2004.
- 7) 金子道子編著：ヘンダーソン，ロイ，オレム，ペプロウの看護論と看護過程の展開，照林社，1999.
- 8) 金子道子監修：看護学臨地実習ガイダンスⅠ－看護学理論のまとめと実践－基礎看護学・地域看護学，医学芸術社，1999.
- 9) ヴァージニアヘンダーソン，湯模ます訳；看護の基本となるもの，日本看護協会出版会，1963.
- 10) ヴァージニアヘンダーソン，小玉香津子訳；看護論25年後の追記を終えて，日本看護協会出版会，1982.
- 11) アニタ W. オトウール，池田明子他訳；ペプロウ看護論－看護実践における対人関係理論，医学書院，1996.
- 12) パトリシアベナー；井部俊子訳，ベナー看護論，医学書院，1992.
- 13) パトリシアベナー編著，早野真佐子訳；エキスパートナーズとの対話ベナー看護論・ナラティブス・看護倫理，照林社，2004.
- 14) 特集 教師にもとめられるもの，看護教育，Vol.4, 2003.
- 15) 加藤重子：ラベルワークで学ぶ「患者－看護者関係」学生の成長から見たラベル技法の効果，日本日本看護福祉学会誌，Vol.9, No.1, 2003.
- 16) 加藤重子：看護師の継続教育“組織的な参画の場づくり”支援～ラベルワークによるエンパワーメントアプローチ～，日本看護福祉学会誌，Vol.10, No.1, 2004.
- 17) 棟久恭子，加藤重子：ラベルワークを用いて指導観を育てる～同僚看護師による臨床指導者支援～，日本看護福祉学会誌，Vol.10, No.1, 2004.
- 18) 氏家幸子；看護基礎論，医学書院，2004.
- 19) 中村雄二郎；臨床の知とは何か，岩波新書，1992.
- 20) 吉谷須磨子；看護構造学習入門，真興交易医書出版部，1989.
- 21) 舟島なをみ；看護教育学研究，医学書院，2004.
- 22) 厚生労働省医務局看護課；看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，看護教育，Vol.44, No.6, 2003.
- 23) 文部科学省高等教育局医学教育課；看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標－看護学教育の在り方に関する検討会報告，看護展望，Vol.29, No.8, 2004.